

中川成之輔先生を偲んで—信念と信義の人—

浅沼義博

秋田大学医学部第1外科

中川先生には、2つの強烈な思い出があります。

1980年秋、私は cryofiltration の発表と実施のため、能勢先生とともに日本に一時帰国しました。その時初めて中川先生と身近に接する機会を得ました。能勢先生が、「今度アメリカで middle molecule に関するシンポジウムを開くので、シンポジストとしてきてくれませんか」と依頼したところ、中川先生は「いいですよ、ただ私は middle molecule theory は信じていませんが、それでもよろしいですか?」と答えられました。当時、能勢先生はアメリカで CAPD の普及と改良に力を注いでおられ、middle molecule の重要性を主張する側にいましたし、外科の徒弟制度の中で初期研修を終え、Boss is always right. に始まる Cleveland Clinic 人工臓器部の十訓を毎日見ている私は、その答えを聞いて、「エッ!」と思わず中川先生の顔を見上げたものでした。それは私にとって新鮮な驚きであり、この先生は権威や時流に媚びない信念の人であることを確信しました。

もう1つの思い出は SS 君のことについてです。Cleveland Clinic で共に仕事をした SS 君が、1984年10月、事故で急逝しました。同じ Mayfield Heights に住み、公私とも苦勞をともにした SS 君とはなぜか

馬が合い、帰国してからも時々近況を報告し合っていた私にとって、まさに痛恨事でした。中川先生は、その直後の日本人工臓器学会で、SS 君が発表するはずであった論文を共同研究者として、哀悼の意味もこめて、自分が発表するといっておきました。そしてご自分が発表するに至った経緯も含めて、堂々と SS 君の仕事を発表し、そして評価して下さいました。あれは、SS 君の立派な供養になったと私はずっと中川先生に感謝しておりました。

人工臓器の編集委員会で中川先生には5年間ご指導いただきました。様々な困難な問題に対処する際、委員長としての中川先生の態度、方針は、学会の発展と後進の育成のためになるかどうかとの視点で一貫しており、私が個人的な事例を通して抱いていた信念と信義の人との観を一層強くした5年間でした。ある時、委員会の席上「Krebs になってね、あとどの位頑張れるかわからないが(神様から)与えられた仕事はやるだけやる」とおっしゃった、飄々とした先生のお姿が、まだ心に残っています。多くの大切なことを教えて下さいました。実に立派な先生でした。心からご冥福をお祈りします。